

想像を超えた その先に…



千葉市国際交流協会国際交流員
Erica Nakanishi-Stanis
ナカニシースタニス・エリカ

初めて家族に配属先が千葉県だと知らせた時、私は彼らが喜んでくれると思いましたが、しかし、実家が三重県にある母は、遠いことを残念がることも「田舎に派遣されたね」と、爆笑しました。期待はずれな反応にがっかりしつつ、アメリカ人の父に知らせたら、「千葉って何処だった？」と聞かれてしまいました。「千葉県はれっきとした文化都市で、生活し、働く場所として何の問題もない場所なんだ」と必死で自分に言い聞かせましたが、実は、千葉には小さい頃一度だけ鴨川シーワールドに行ったことしかなかったので、かなり不安でした。

千葉と三重では遠すぎて頻繁に会いに行くのは難しいという点では母は正しかったのですが、派遣先は田舎ではなく人口九十五万人を誇る政令指定都市の千葉市でした。千葉市は東京のベッドタウンではないと言いますが、独特の歴史や文化を持つ素晴らしい都市だと私は確信しています。多くの公園や図書館、国内最大級のコンベンションセンターのほか多数の施設がそろっているため、いつでも何かしらあります。そして千葉市は広く、海と森、農地と年中咲いている花も見ることができるので自然にも大変恵まれています。

国際交流員としての仕事にもうれしい驚きを感じました。シカゴを発った時、新参加者がモトローのように聞かされた「各自の状況は異なる」だけを心得ており、新し

い職に伴う責任や業務についてはあまり把握できていませんでした。しかし着任から半年以上がたつ間に様々な事業に携わることができました。

例えば姉妹都市から来日した市長や市議員の通訳を務める他、青少年交流事業の生徒に日本の文化についての説明、友好関係を祝うために来日した文化芸術団の公演の手伝等を行いました。日常的な仕事は翻訳と通訳、英語教育と情報誌の作成に分けられますが、どれも千葉市の国際化促進のためになると信じています。また、外国人市民からの生活相談に応じることもあるので、仕事は変化に富んでいます。ここ半年で仕事を通して千葉市や、共に暮らしている市民に対し少しずつ親近感が湧いてきた気がします。

人口九十五万人を誇る千葉市には約二万二千人の外国籍の市民が住んでいます。その数も増え続ける中、市でも多文化共生推進に向けて様々な企画に取り組んでいます。自分が今までやってきた仕事が千葉市のためになることを信じながらも、更にネットワーキングを進めることが必要だと思えます。

国際交流員になる前は「コミュニティーの連携活動をしたこともあり、千葉市でも同



↑姉妹都市文化芸術団の表敬訪問
挨拶を通訳

じような働きができたらと思っています。困った時には千葉市の国際交流協会に頼れると知っている外国人市民もいれば、それが十分に伝わっていないところだってきつとあります。多文化共生は法律上だけでなく、市民がそれぞれの国の風習や文化を分かち合い、日本社会の中で共に平和な生活を送るためには何を心がけるべきなのか、双方の意見を聞き入れてから進めるものだと思います。



↑国際文化フェスティバルの開会式挨拶を通訳

そのため、今後も必要性を囿りながらも自分も同じ町に暮らしている外国人とその周囲にいる日本人のために何かできないだろうかと、いくつかの企画を進めたいと思っています。特に国際交流協会の事業や存在について積極的にアウトリーチャやネットワーキングを行うことや、ネットでイベントや市政情報を提供する場面を作成する他、市が市民に提供する情報の多言語化を進めていきたいと思っています。もちろんこれらは協会スタッフだけでなく、市民の方々と関係団体と話し、調整しつつ実行されることになりませんが、市民や職員の間にはこれからも互いに、コミュニケーションをとることが必要だという考えが見られます。私にできることは少ないかもしれま

せんが、千葉市が誰にとっても暮らしやすいところになることを目標として今後も頑張りたいと思います。

仕事では充実した毎日を送っている一方、私生活では時に困ることもあります。これは主に私が日米ハーフであることから発生する問題です。日本は単一民族の国だと言っている人が多いですが近年では、グローバル化における国際結婚の増加もあり、ハーフや日系と称する人が増えているのが現状です。単一民族だと言われながらも明らかにその枠に入らない自分は「居場所」を探すが困難であり、ごく最近までは自分がハーフであることを誇りに思った時もあるが、逆にそのアイデンティティーに不安を覚えたこともあります。しかし今はこのように悩むことは自分にとって決して損ではないと思っています。懸念していたものの、国際交流員の仕事を通して自分の国際的な経験と系統を活かし、今や二つの文化を持つていることを長所にしていきます。色々な人の心配や問題を多数の視点から見られるのは大きな利点であり、多文化共生が実際になれるを意味し、市民レベルではどうやって実行するかを考えるためには必要な土台です。

アイデンティティーや人種のことでも悩むこともまだありますが、日本で働き、暮らすことによって自分の居場所は、形のはっきりしない社会ではなく、ここでもアメリカでも国境を問わず、自分のことを受け入

れてくれる家族や友だち、コミュニティの中にあることが分かりました。認識できたのは千葉市での経験、そしてJETプログラムのおかげなので、心から感謝しています。



Erica Nakanishi-Stanis

アメリカ・シカゴ市出身で、ウィスコンシン州立大学人類学部で考古学を専攻しました。千葉市国際交流協会での国際交流員を務めています。趣味はキックボクシング、二胡のお稽古、読書に旅行です。

各自の状況は本当に異なりますが結果としてそれは国際交流のためになるものだと思います。そして、私も今後、自分のユニークな経験を通して千葉市で国際理解と協力を進めたいです。

一期一会

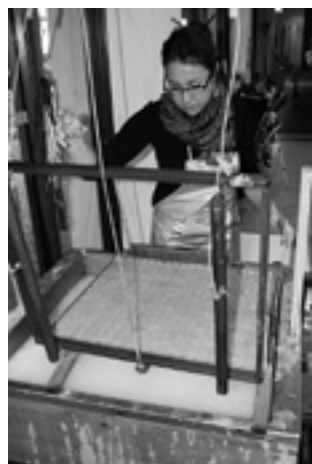


高知県南国市立香南中学校外国語指導助手
Mia Reiko Braverman
ミア・レイコ・ブラバーマン

高知駅から徒歩一〇分、この辺で一押し
の野菜サンドを作っている小さなカフェが
ある。このカフェへはよく行くのだが、理
由はそのおいしいサンドだけではなく、オ
ナーの佐藤さんがいるからだ。佐藤さ
んの仕事に対する優雅で熱い姿勢は、そ
のカフェを空腹を満たすだけの場所ではな
く、刺激を受けられる場所になっているの
である。

流れている古いブルースが常連たちを癒
している間、佐藤さんは、味のある木製の
カウンターの後ろで注文の品を作ってい
る。彼の作る料理とコーヒーのクオリティ
ー、そして彼がお客さんと持つ繋がりを見
れば、自分のカフェに誇りを持っているこ
とがよく分かる。こんなに情熱とこだわり
を持った人を見ていると感心するものだ。

いつの日からか、佐藤さんのカフェの隣
にあるビルに興味をそえられるようになって
いた。窓いっぱい大きい、色とりどりの絵
が並べられてあり、中をちょっと覗いてみ
るとなんらかの美術学校だと分かった。母
国で美術教育の仕事をしていたため、ガラ
ス瓶に立てられたクレイに削られた鉛筆
や、散ったペイントがごびり付いた作業机
といった懐かしい風景を見ると、胸が騒い
で居ても立ってもいらなかった。佐藤さ
んに何か知らないかと聞いてみると、「障
害をもった子供や大人のためのアートセ
ンターだよ」と答えた。これは私にとってお
手ものだ。興味がわく一方、躊躇する理



↑高知市伊野町にて伝統和紙の制
作を習っているミアさん

由がひとつあった。それは、私の日本語力
への自信のなさだ。

そのとき私は高知でALTとして六カ月
ちよつと働いていて、日本での生活にはだ
いぶ慣れたころだった。しかし、日本語で
話すことはまだまだ恥ずかしかった。その
ため、そのアートセンターへ行くことを躊
躇していた。佐藤さんは私のためらいに気
付き、「今日、行ってみればいいじゃない」
と何度も後押しをしてくれた。ある日、こ
れ以上あの場所の持つ可能性を探検せず
にはいられないと思い、行ってみることをや
つと決意した。佐藤さんにお礼を言うてあ
の場所へ向かった。

外には「音楽センター」と書いてある
看板があった。扉を開け、中を見渡した。
“Hello? Konnichiwa...?” これまで外から
覗き込んでいたときの色あせたイメージ
が、スケッチや絵画、小さな彫刻の数々で、
鮮やかに彩られた。明るくて暖かい目をも
った女性が「どうなさいましたか？」と声
をかけてきた。佐藤さんからこのアートセ
ンターの話しをちよつと伺い、ボランティ



↑高知市で開催した画楽センターによる展示会の「画楽プロジェクト vol.1」には、ミア・レイコ・ブラバーマンさんによる短編映画が上映された。この作品は、画楽センターにいるひとりの男性から影響を受け、作られた。また彼の作品は、この展示会でも紹介された。

アをしたいが可能であるかと聞いた。五分もしないうちに私は作業机に座っていて、前には過去数年やってきたプロジェクトの写真がたくさん詰ったアルバムが山積みになっていた。ぼろぼろになった和英辞書を手に、私は自分の指導経験を語り、彼らが提供しているプログラムのことを詳しく説明してもらい、私がどのように加われるか教えてもらった。その日、早速ボランティアの申込書を持って帰った。すぐに記入して提出し、数週間後、日曜日のワークショップで手伝つことになった。

最初の授業で、私が言葉の壁に抱いていた不安は薄れ始めた。そこにいることだけで嬉しかったからだ。授業が始まり、先生

がその日のプロジェクトの説明をしながら部屋を踊り回っていると、生徒たちの追っている目が興奮して見開いた。皆そこにいることが嬉しいのだ。プロジェクトを始めて生徒たちと一対二で接することができて、彼らとコミュニケーションをとるための手段はしゃべる言葉だけに限らないと気付いた。時には線、色、形状、そして真っ白な紙さえあれば、言葉なんて必要なかった。

一緒に作業をしている間、私は佐藤さんと彼のカフェに対する熱意や、活気ある姿勢を持つ先生たちのことを考え、何かを作ることに純粹な喜びを感じている生徒たちを見た。私は情熱に囲まれていることに気が付き、急に圧倒的な確信を覚えた。私は自分にとって正しいところにおいて、自分の熱意がここで育てられると確信をもてた。画楽センターでの活動を一年以上続けてきて、その確信は今も続いている。

今は、彼らのプログラムにもっと積極的に加わっている。毎年恒例のアートキャンプでしおり作りのワークショップを教えたり、一人の生徒を主題にした短編映画を作ったり、JET友だちのバンドと一緒に音楽とムーブメントのワークショップを企画した。また、ハワイにある私の地元で、国際アートキャンプを開くことに向けて話を始めている。高知駅から徒歩一〇分、こんなに感動を与えられる人たちに出会えるなんて、私の日本での生活において欠かせない存在になるなんて考えもしなかった。そ



Mia Reiko Braverman

私は米国・ハワイ州のカウアイ島出身のミア・ブラバーマンといます。カリフォルニア美術大学でコミュニティ美術と美術教育を専攻しました。趣味はウクレレやアウトドア活動やリサイクルショップで買い物することです。JETプログラムに入った理由は教師としての経験を身につけると同時に、和紙に興味があるからです。来日して、和紙の造りかたや三味線を習うことができました。障害者青年のためのコミュニティ美術センターでもボランティアとして働き始めました。帰国したら、芸術療法の修士を取得したいと思っています。

して大事なのは、言葉で教えてもらったことより見せてもらったことだ。

Exceeded Expectations

When I first told my family that my placement was in Chiba Prefecture, I was expecting them to be excited for me. Instead, my mother's family, largely from Mie prefecture, laughed at my being in the inaka and then said it was a shame that I'd be so far away. This was hardly the reaction I sought, so I told my father's family the news, hoping for a more enthusiastic response. My announcement was met with blank stares. Frustrated, I tried to reassure myself that Chiba was a perfectly respectable place to live and work, but having only been there once as a child to visit Kamogawa SeaWorld, my rhetoric stood on shaky ground.

While my mother's family was correct about Chiba and Mie being too distant to make visits frequently, my placement ended up being in Chiba City, a Government Ordinance Designated City of 950,000 people. Though many consider Chiba City a mere suburb of Tokyo, the area has plenty of history and resources of its own. With 24 major parks, 35 public libraries and one of the largest convention centers in the nation, there is always something to do, and the abundance of stores mean that material needs are often easily met. The city spans a relatively large area, and boasts not only the contrast between its parks and beaches, but also its farmlands and high rise buildings.

Being a Coordinator for International Relations has also been

a pleasant surprise. With only the mantra, "Every Situation Is Different" in mind, I left Chicago with little idea of what to expect from my new job. Most of the projects I have since worked on have involved international exchange in a more traditional sense. This includes interpreting for political delegations, acting as a tour guide and cultural ambassador for student exchange participants, and helping coordinate the details of a sister-city cultural delegation's performance. More day to day work involves translating and interpreting in English, Spanish and Japanese, teaching an English class, and writing the International Association's quarterly and monthly English newsletters. Between these tasks and the occasional request for assistance from a resident, most days pass quickly. I have had the opportunity to learn a great deal about the city I live in and the residents, both foreign and native, who call it home.

Chiba City has a population of around 22,000 non-native residents. As these numbers grow, the municipality has begun taking steps to implement a local version of the national initiative, "tabunka kyosei," or, "multicultural coexistence." I believe that the work I do serves a purpose for the relationship of Chiba City with its sister cities and for the residents who know to look to the International Association for help if they need it. At the same time, with a city this large and a steadily growing population, there is

Ichigoichie

There is a small café about a ten minute walk from the Kochi City train station that has some of the best vegetable sandwiches around. I frequent this little restaurant in part due to these delicious sandwiches, but it's also because of Sato-san, the gentleman that owns the shop. The elegance of this man's love for his job makes his café not just a pit stop to ease a hungry belly, but rather a full sensory experience.

Old blues records serenade a slew of regular customers while Sato-san prepares each of their orders behind a beautifully worn wooden counter. You can see the pride he has for his café in the quality of the food he makes, the coffee he brews, and the relationship he has with his customers. It is a pleasure to watch him, to witness a man working with such passion and attention to quality.

Next door to Sato-san's café was a building that I had become increasingly intrigued by. Large colorful paintings filled the front windows, and one day after a quick peek, I could tell it was some sort of art school. I had worked in arts education in my home country, and the familiar sight of jars of freshly sharpened pencils

and paint splattered tables made my heart thirsty. I decided to ask Sato-san if he knew anything about it. "It's an art center for children and adults with special needs," he answered. This was certainly up my alley; my curiosity grew but one worry stood in my way: my insecurity in my Japanese language skills.

At that point, I had been working as an ALT in Kochi for a little over 6 months, and while I was beginning to feel quite settled in my life in Japan, I was still very shy about speaking in Japanese. So much so, I was apprehensive in visiting the neighboring art studio. Sato-san sensed my apprehension but continued to encourage me. "Just go over there today," he would say. And one day, I realized I couldn't let the opportunity go uninvestigated any longer, and I decided to go for a visit. I thanked Sato-san for the encouragement, and off I went.

Garaku Center, I read on a sandwich board out front. I opened the front door and looked around the studio. "Hello? *Konnichiwa...*?" The faded images from my past peekings suddenly became saturated by countless colorful drawings, paintings, and small sculptures. A woman with bright, warm eyes approached me



Erica Nakanishi-Stanis

definitely room to expand networking and outreach efforts.

Prior to becoming a CIR, I had some experience in community organizing and was hoping to continue working in that vein. In addition to my other tasks, I have proposed several projects to help integrate the too-often disparate communities of native and non-native residents. Among these proposals are a community outreach program to spread awareness of the International Association's projects and services, the creation of an online event and news broadcasting resource, and the fortification of the city's foreign language resources. While the execution of these ideas is subject to the sometimes lengthy collective decision-making process and a fair share of revision, there is a growing sense of need among community members and municipal employees for greater communication and cooperation. Hopefully my work in the future can focus that need and help foster the creation of a dynamic network of individuals that can live and work together in harmony.

In contrast to the largely positive experience that my work has been for me, my personal life has sometimes posed more delicate issues, relating, in particular, to my being half-Japanese. In a society that considers itself homogeneous, it can be an uncomfortable struggle to determine one's place when coming from a mixed-race background. Until recently, I have wavered between being proud

of my heritage, and being uncertain about how I identify. Though finding acceptance can be difficult, I have found that the dilemma over identity is well-worth having. Despite my doubts, my job as a CIR has created a productive outlet for me to capitalize on my international heritage and experiences. My heritage is my strength in this job, and the ability to see a person's struggles and concerns from more than one context has been an immeasurable asset. Naturally, not everybody I meet or work with is from the either the U.S. or Japan, but having a more international, fluid framework for discussing each person's needs and for thinking about "*tabunka kyosei*" multicultural co-existence is a strong foundation. I still find myself struggling with issues of identity and race, but over time I have also formed a network that reminds me that my place is not in an amorphous "society," but that it is among the diverse community of individuals and family I have here and in the U.S. I owe this realization to my experiences in Chiba City, and I owe that, in turn, to the JET Programme, and am thankful for what I have gained.

Each situation truly is different, however, I believe that is to the benefit of "international exchange." And it is my hope that my unique set of experiences will ultimately help foster understanding and cooperation in Chiba City.

英語

Mia Reiko Braverman

and asked, "How can I help you?" I mentioned that I had heard a little about the organization from Sato-san, that I was interested in volunteering, and asked if that would be a possibility.

Within five minutes, I was sitting at one of the art tables with a pile of albums filled with photos of projects they had done over the past several years. With the help of my weathered Japanese-English dictionary, I shared some of my teaching background and they detailed some of the programs they offered and how I could possibly get involved. I left the center that day with a volunteer application. I immediately filled it out and returned it, and within a few weeks, I was scheduled to assist them during a Sunday workshop.

During the first class, my insecurities with the language barrier started to fade. I was too excited just being there. When the class began, I watched the students' eyes widen with excitement as the lead teacher animatedly danced around the room explaining the project for the day. Everyone was so happy to be there. As we began the project and I was able to work one-on-one with the students, it became clear to me that my ability to speak to them was not limited to verbal communication; a pallet of lines, colors, shapes, and fresh

sheets of paper were often words enough.

As we continued to work, I thought about Sato-san's love for his café, and the teachers with their motivating attitudes. I observed the students, and the purity of their joy in what they were creating. I saw that I was surrounded by passion and I was suddenly struck with an overwhelming sense of certainty. I was certain that I was in the right place, that this was where my passion could live and grow. Having continued my relationship with the Garaku Center over the past year, that certainty persists.

I have also been able to become more involved with their programs by teaching a bookmaking class during their annual art camp, making a short film about one of the students, helping to plan a music and movement workshop collaborating with a fellow JET band, and looking forward, we have begun discussing an international art camp at my home town in Hawaii. Little did I know, just a ten minute walk away from the Kochi City train station, I would meet such inspiring people that would become one of the most important parts of my life in Japan. And it is not so much for what they've told me but what they've shown me.

英語